
名も無き世界への召喚～inネギま～

羅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名も無き世界への召喚（innネギま）

【Nコード】

N7402K

【作者名】

羅人

【あらすじ】

サモンナイト3の主人公であるレックスが昔砕けたはずの魔剣、シャルトス碧の賢帝が蘇り、なんか色々かみ合ってネギまの世界へ。

ナギの仲間になったり学園へいたりという意味不明が多くあるかもしれません。

ゆくゆくはハーレム？になっていく予定ですが、結構原作を壊すと思います。サモンナイトを知らない人にも解りやすくしていきますのでどうかよろしゅう。

プロローグ 召喚

「・・・これより異界の民を呼ぶ」

「でも本当にやるのか？危険じゃないのか？呼ぶ世界を指定せずに召喚なんて・・・」

そこは暗く澱んでいてる場所

「もう我々には後が無いんだ！！これもあの「赤き翼」のせいだ！仲間はやられこの部隊にはこれしか手がない！・・・異論は無いな？」

「「「「・・・はい「「「「」

光は差すがけっして明るいとはいえない

「それでは始める・・・」

昏でさえ重苦しい雰囲気を漂わせるそこは

「」「」「我等が契約に従いここに異界の民を召喚する」「」「」

憎しみや悲しみ、恨みといった負の感情が行き交う闇の巣窟

「よしっ！繋がった。成功だ！」

「・・・ん？ちょっとまって！様子がおかしい・・・これはっ！..!」

闇はまた闇を呼ぶ。

「な、なんだこれは！うっ・・・ぐあああ」

そしてそれはより強大な物となって

「ひいっ！..!、こんなときいてないぞ！..!」

同じ闇を喰らっ

その島には四つの集落があった。

機界ロレイラル、鬼妖界シルターン、霊界サプレス、幻獣界メイト
ルパ

それぞれの世界を象徴とした集落には一人づつ、集落をまとめる長
「護人」がいる。

そんな島にはいまだ戦争の爪跡が残っていた。

だがそれももう昔の話。今ははぐれとなった召喚獣が平和にくらし
ている。

・・・はずだった

「もう抑えきれないわっ！」

「諦めんじゃねえ！」

「集落の者たちを逃がしたと言っても、このまま暴走し続けられずれば……」

「っ、でもなんで！？あの時完璧に封印してもう暴走する要因なんてないはずなのに」

帝国軍や無色の派閥が島を襲ってから一年ほど。

「大丈夫！俺が抑えるから！」

平穩から一変、島は3度目の危機に直面していた。

「抜剣ッッ解放オオオオ！」

-
-
-
-
- 我ハ蘇ッタ -
-
-
-
-

「！？」

「っ！そんな・・・ありえないわ！！」

「嘘だろ？オイ！」

「わ、私は今夢でも見ているのか？」

「そ、そんな・・・ど、どうしてレックスの魔剣が・・・」

「・・・異世界ノカニヨツテ・・・」

「どうして・・・あの時砕けたハ・・・ず・・・な・・・ノニ」

- - - 適格者ヨ、今こそ呼び掛けに答エル時 - - -

「いつ・・・たい・・・ナ・・・ノ・・・ことだ」

「いけません！吞まれています！！」

「やべえ！急いで止めるぞ！！」

「来ちゃだめだ！！だ、大丈夫。なん・・・とか・・・制御は・・・
できテ・・・ル・・・から」

- - - サア、力二身を任セルのだ - - -

「五月蠅い！！もうオ・・マエ・・につ！俺は負けない！！」

- - - - -
ヌウ！？ - - - - -

「アルディラ！遺跡を封印する準備はできてたよね！？」

「え、ええ。でもレックス、あなた大丈夫なの！？」

「大丈夫！・・・よし！今から遺跡を封印する！！ハアアアアア」

青年は使う

「やった！遺跡の暴走が治まったわ！」

たとえそれが禁忌の力だとしても

「いや、まだよ。喚起の門が治まっていないわ！……それどころかさらに激しくなってる！？」

ただ守るために

「なんだこの光は！？」

ただ救うために

「っ！レックス殿！！」

ただ笑うために

「だめっ！魔力の暴走が激しすぎて近づけない！」

たったそれだけのことを願っ

「いけない！魔力がここに溜まりすぎてゐるわ。このままじゃ何が出来るか・・・！」

そして願った青年は

「「「う、うわあああ
「「「

召喚^{呼ば}れる

- - - 呼ンデイル我を - - -

魔剣はただ淡い光を放ち、青年と共にその場から消え失せる。

暴走が治まるとそこに残ったのは

倒れた護人と、暴走により傷ついた大地

- - - 適格者ヨ、今度ハ我等ガ行クノダ - - -

青年と魔剣は・・・もうここにはいなかった

- - - 異世界ヘト - - -

プロローグ 召喚（後書き）

ここで書かせていただくのは初めてになります。久しぶりに書いたのもうしっちゃんかめっちゃんかです！！

・・・ハイ、すいません威張るところじゃなかったですね。

この物語の題材は「ネギま」と「サモンナイト3」です。ネギまはともかくサモンナイト3は知ってる人が少ないと思われます。知ってる人はどうか設定の矛盾に目を閉じて、知らない人はなんとなく流れを理解していただければ幸いです。

レックスがなんかの呪いでアテイになるイベントがあるかもしれません。

と、いうわけで今後文章の書き方が一話の内に「ガラツと変わる！」・・・なんてことになると思いますので、どうか温かい目で見てやってくだせえ。

長くなつてすみませんしたあ！！

緑と赤の出会い

暗く深い闇が包む場所。

先ほどの異常な魔力の暴走が嘘のような静寂が辺り一面を覆う。

声は無く、音も無い。

そこには死体や血が散乱していた。

ある者は手が無く、またある者は脚が無く、そしてまたある者は胴体が無い。

何かを召喚するための魔法陣は、血により真つ赤に染められている。

そんな中に一人、緑に輝く剣を持った青年が佇んでいた・・・。

- - - side レックス - - -

あれからどのくらい経ったのだろう。遺跡を封印してからの記憶が無い。いきなり起きた遺跡の暴走、もう存在しないはずの魔剣、そして今のこの状況。分からないことばかりだ。

「・・・ここは・・・ドコだ」

朦朧とした意識の中、断片的に考えをまとめようとするが目の前の

光景にはほとんど意識が向かない。普通なら現実逃避をしているからであろうが、今の彼は違う。ただ感想が浮かばないのだ。

悲しみも不安も、恐怖や哀れみさえも感じない。普段のやさしい彼では考えられないようなこと。

いや、ここに居るのはレックスでありレックスではない存在。魔剣の影響からか、今のレックスには死に対する感情が一切無いのだ。

「血が・・・こんな二・・・」

- - - 適格者ヨ、目覚メタカ - - -

「だ・・・れ・・・？」

この世界の召喚術により復活した緑の剣帝シャルトスを制御しつつ、遺跡を鎮静化させたレックスにはもうほとんど精神力は残っていなかった。ゆえにいまは抜剣解放状態であり、自我はほとんどなく、シャルトスの意思が強くなっていた。

- - - フム、精神が崩壊シカケテイルナ - - -

そう、彼にはもう精神力が残っていない。その原因となったことにより、彼の精神は限界まできていた。

それこそ、これ以上負担を掛ければ死んでしまうほどの。

- - - 我二トツテモココデ適格者ガ居ナクナルノハ避ケタイ。
ココハ退クトスルカ - - -

そう言うのと魔剣から淡い光が消え、ただの細身の剣に変わっていく。しかし輝きを失う直前、その場に赤毛の男がいた・・・。

- - - side ナギ - - -

よお！俺の名前はナギ。サウザンドマスターことナギ・スプリング
フィールドだ！え？知らないって？おかしいな。今は「赤き翼」っ
てのを創って結構有名になったと思うんだけどな。

まあいいや、今俺たちはメセンブリーナ連合に雇われてる。んでつ
いさつき帝国の奴とやりあって帰るとこだ。

「今日の敵は結構骨があつたな」

「フッフ、我々の名も有名になりましたからね。敵も私たちを危険
視しているのでしょう」

まあやりがいがある奴が増えんのはいいけどな。

「でもなんか少し様子つつつか戦い方が変じゃなかったか？」

「ああ、それは俺も感じていた。まるで何かをまってる様な戦い方だったな」

「フム、援軍でも来る予定だったのかの？」

「そつならもつと早く来て欲しいぜ。まだまだ暴れたんねーんだよな」。

そんなことを考えてる俺だが、次の瞬間とんでもない魔力を感じた。

「っ！おいアル！」

「ええ、気づいてますよ。しかしこの魔力は・・・召喚術による物ですか？」

「だとするとさっきの奴等はその召喚術をまっけてたってことか！？」

「話は後だ。いくぞアル、詠春、お師匠」

他の三人がなにか言うのも聞かずにナギはその魔力の発信源へと走った。仕方がないと三人も後を追う。

発信源には走って10分ほど、草も木も生えていない荒野。そして彼らはその一角で旋律と久方ぶりの恐怖を感じることとなる。

「んだこりゃあ・・・」

まず目に入っただのは無残な死体。手足や頭が無い変死体である。何故変死体なのかというと、無い部分が切断されているのでもなく、引き千切られたのでもない。まるで何かに持っていかれた様に消滅しているのだ。

「これはヒドイですね・・・おそらく召喚術による暴走でしょうか」

「これほどの人数が全員死んでしまうほど大きな暴走か、じゃが死に方が少しきになるのう」

「・・・いやまで！あそこに誰がいるぞ！」

詠春が叫びながら指を指す。そこには一人の男がいた。背を向けているから顔は見えねえが、白銀の腰までとどく長い髪、右肩の辺りにあり緑色に光る棘の付いた輪が浮いてる。まるで太陽みてえな形だ。あと同じく右肩から手の甲まで溶け込むように白いモサモサがついてる。

けどそんな異様な格好を差し置いて一際目に入る物があつた。それは男が持っている剣だ。

「なんだあの剣」

「あれは魔剣じゃ！それもかなり強力じゃぞ」

「たしかに強力ですが、それよりもあの魔剣が発する禍々しい気の

方に注意したほうがよさそうですね・・・」

いままで魔剣を見たことが無い俺でも解る。あれはヤバイ！いまま
で見てきたどんなもんよりも。けどここで退くわけにはいかねえ。
とりあえず話かけてみるか

「おい！お前はだれだ？」

俺が奴に話しかけてみると意外にすんなり反応してこっちを向いた。
そしてこの時俺は、いや、俺達は久しぶりの恐怖を感じたんだ。

「だ・・・れ・・・？」

男は整った顔立ちをしていた。しかし顔に表情がまったくない。返
答するために動いた口以外はまったく動いていない。男はこっちを

向いたまま微動だにせず俺達を見つめている。

はつきり言って怖え。奴の透き通った緑色の目は表情と同じくまったく感情が無いように見える。本当に俺達を見ているのか疑っちゃうほどに。

「お、俺はナギ・スプリングフィールド。あんたは？」

情けなく畏縮しながらも俺は奴の返答に答えた。他のみんなは話す気などないと言わんばかりに殺気立っていた。この場の奴以外が全員冷や汗を掻く。

「お・・・れ？おれ・・・は・・・だれ・・・だっ・・・け」

は？つと俺達が訳が分からなくなっていると、奴がいきなり倒れた。それと同時に魔剣の光が消えていって・・・ただの剣になっちまった！？

そして今度は奴の姿が変わった。白銀の髪は赤く短くなり、肩にあった輪も無くなっている。なんか腕についてた白いモサモサも無く

なってるし・・・。

「おいアル、これ・・・」

「理由は解りませんが魔剣の力が消えたのでしょうか。この姿が彼の本当の姿ということです」

「おい考えるのは後だ。よく見るとこの人怪我してるぞ。早く治療しないと」

「フム、そうじゃの、では一旦戻るとしよう。治療はそこですればよい。話は目覚めてからでもよいじゃろ」

「わかったぜ。んじゃさっさと戻るか」

そして俺達はこの名前も知らねえ男を担いでメセンブリーナまで戻った。

戻る途中俺は内心ほっとしていた。こいつと戦わずにすんだと。

それほどさっきのこいつには恐怖を感じていたことを自覚しながら・
・。

緑と赤の出会い（後書き）

4日ぶりに投稿しました。

書くのが遅くてどうもすみません。

今後は最低三日に一回は投稿できるようにします。

さあいよいよレックスがナギ達と出会いました！

この後は最終決戦までポンポン飛ばしていきたいと思っています。

えゝこんなものを読んで下さる方、ホントにありがとうございます！（泣）

今後ともどうかよろしくおねがいします！

もし良かったら評価をもらえるとうれしいです！

青は赤へと

- - - side レックス - - -

目を開けると知らない天井があつた。ラトリクスのベッドじゃないし船では・・・ないね。とりあえず体を起こして辺りを見てみたけど、やっぱり見覚えが無い。

なんだか頭もハッキリとしない。そういえば俺は遺跡を封印しようとしてたんじゃ・・・いや、封印はしたんだつた・・・たしか。後覚えてるのは・・・赤い髪・・・？

「おや、お目覚めですか？」

考えているといつのまにか人がいた。笑みを浮かべながら話しかけてくるあたり、敵じゃないみたいだ。・・・ちよつとその笑顔が信じにくいけど。

「あ、はい。あなたですか？助けてくれたのは。・・・もしよければ事情を聞かせてもらえるとありがたいんですけど」

「？それは奇遇ですね。私もちよつどあなたに事情を聞きに来たのですよ」

え、俺に？そんな反応をしていると目の前の人が驚いたような顔をしていった。

「まさか覚えていないのですか？」

覚えてる？なにを・・・いつつ！突然頭が痛くなって頭を抑える。

「！大丈夫ですか？どこかまだ治療できてん・・・」

「だ、大丈夫です。もう痛みは引きましたから」

本当はまだ少し痛いけどこれ以上迷惑になるわけにはいかないからね。それに痛みと一緒に少し思い出した。

「・・・赤い髪」ボソ

「ん？ああ、なるほど。たしかにあの鳥頭は目立ちますからね、フフ」

「え？」

「いえいえどうやら私だけよりナギがいた方が話しが速く進みそうですから」

そついうと男の人はまた微笑みながら部屋を出てく。

「あ、ちよっ!？」

あ・・・いつちゃった。それにしてもなんだったんだろう。・・・
ナギさんか。最近どこかで聞いたような・・・。

-
-
-
-
side
レックス
out
-
-
-
-

-
-
-
-
side
ナギ
-
-
-
-

アルによるとあいつが目覚めたらしい。なんでも記憶が曖昧で、俺のことをかろうじて覚えてる程度だそうだ。だから俺っていうかみ

んなで話を聞いてみたんだが…

「うつ・・・うえ」

吐きそうになってる。たぶん俺達がこいつを見つけた時の状況を思い出してるからだろう。たしかにあの場所は普通の人間が見たらしんどいだろうな。

「お、おい大丈夫かよ!？」

「う・・・うん、なんとか・・・」

「魔剣を使っているときと普段では性格が大きく変わっているのか？」

「まあそんなことはどうでもいい！なあ、あんた俺達の仲間にならないか？というか一回戦おうぜ！」

そう、んなこたあどうでもいいんだ。こいつは強い。あの時の威圧感が魔剣のせいでも、俺があれだけ恐怖を感じるほどだ。こんなワクワクするやつをほっとく手はねえ！

「まあまちなさいナギ。まずは話を聞いてからです」

えゝめんどくせえな、早く戦いてえのに。・・・でもやつぱり気になるな。

「ではそういうことじゃ。すまんが名前を教えてくださいんか？名前を知らぬままでは呼びにくいしの」

「あ、はい。俺はレックスって言います」

名前はレックスか。意外と普通だな。

「俺はナギ・スプリングフィールド。最近じゃあ『千の呪文の男』とか呼ばれてる。ちなみに俺達は『赤き翼』ってのをやってんだが俺はこのリーダーで主人公だぜ！」

「赤き翼？（ひーろー？・・・！）」

「まあようするに傭兵集団のようなものですよ。紹介が遅れましたね、私はアルビレオ・イマ。アルと呼んでくださって結構です」

「俺は近衛詠春。普通に詠春でいいよ」

「わしはゼクト・フィリウスじゃ。ゼクトでよいぞ」

それぞれが自己紹介を終え、本題に入る。

「では改めて話を聞きましょうか。どうしてあなたがあそこに居たのか・・・まあこれは召喚術によるものでまちがいないでしょうが、あなたがどこから来たのか。またあなたは何者なのかをお聞かせ願

いたいですね」

「！ここはリンバウムじゃないんですか？」

「リンバウム？失礼ですがそれがレックスさんの世界なのですか？」

リンバウム、それがレックスの世界らしい。でもそんな世界聞いたことねえな、大抵召喚術つつたら悪魔が住んでる魔界とかだろうけど。

「ええ、いやでもありえない。リンバウムの俺が他の世界に呼ばれるなんて・・・」ブツブツ

なんかブツブツ言い出した。そうだ！じゃあ・・・

「あんたの世界のこと聞かせてくれよ。その方がどっちも納得できるところからさ」

「そうだな。じゃあレックスの世界のことを教えてもらってもいいかな？」

「あ、はいわかりm「ちよとまつた」・・・え？」

レックスが話し始めようとするが俺の声がそれを遮る

「え、えつと・・・なんですか？」

「あのさ、別に敬語じゃなくていいぜ？レックスは俺より年上なんだし、それになんかむず痒いんだよ」

「そうなんだよな。なんかこう敬語で話されるとやりにくいっていうか」

「フッフ、そうですね。私たちはもう知り合いなのですから敬語はやめましょう。普段のままで接してくれますか？」

「は・・・うん、わかったよ。これからは普通に話すね。でもアルは敬語のままだけど」

「いえ、私は普段からこういう話方ですから」

そんなこんなでリインバウムの事を聞いた。

「つまりレックスのいたリインバウの世界の周りにはさらに五つの世界があり、それぞれの世界にエルゴという神のような者がいて、リインバウムの人が別世界に召喚されることはありえない。なぜなら召喚術は昔別世界からの侵略を防ぐために編み出された『送還術』が変化したもので、異界の者は使えないから。ゆえに人間が帝国軍や派閥とゆうものを組織して召喚術を行使している。そしてその召喚術によって召喚された者たちが、主人を失うなどして『はぐれ召喚獣』というのになることが多々あり、レックスはそんなはぐれ召喚獣の島から来たと、いうことでよろしいですか？」

「う、うん。すごいね、一回説明しただけなのに」

「いえいえ、レックスの教え方が上手かったからですよ」

俺にはサッパリだったぞ……。やっぱりこういう頭使うのはアルや詠春にまかせんのが一番だな。

「はぐれといってもさっき説明した悪い方の派閥、『無色の派閥』によって島が丸ごと研究に使われててね、遺跡を魔剣で操作し、喚起の門という巨大な召喚装置であらゆる世界から召喚獣を呼びだし、実験の材料にしようとした。そして今回はその遺跡と異界を繋ぐ喚起の門が暴走して俺がこの世界にきたらしいんだ……」

「魔剣というのはおぬしが持っていたあの緑色の魔剣のことか?」

「そう、でも俺も驚いたよ。まさかシャルトスが復活しているなんて……」

「? ? ということだ。あの魔剣はレックスのじゃないのか？」

詠春がレックスに聞く。俺も思ってたことだ

「ああごめん、言い忘れてたね。みんなも見たようだけどあの緑の魔剣は『碧の賢帝』^{シャルトス}といつて、本当はもう一つ対になる魔剣、『紅^{ルズレス}の暴君』があるんだ。さつき説明したとおり遺跡を操るには本来、この二つの魔剣が無ければできない。言わば核みたいな物なんだ」

「どもレックスはシャルトスしかもっていなかったぞ？」

「それを説明するにはまず昔のことを話さないといけないね。島では昔戦争があつてね、無色の派閥で前にこのシャルトスの適格者だったハイネルという人は召喚獣側について戦った。魔剣の力を使って遺跡を操り、無色の派閥は撃退できたんだけど、ハイネルさんはシャルトスしか持つていなかった。

シャルトス自体、精神が壊れてしまうくらい危険な魔剣なのになった一本で操った反動でハイネルさんは亡くなってしまった・・・」

説明を続けるレックスの表情はしだいに険しくなっていく。

「それでその二十年ほど後に俺がシャルトスの適格者になり、遺跡をねらう無色の派閥や帝国軍の人たちを島の人みなで撃退できた。でもその最中にシャルトスは砕け、敵対していたキルスレスも壊れたんだよ。

シャルトスは新たに『ウイスタリアス果てしなき蒼』として生まれ変わったからシャルトスが復活したことは本当に信じられない。

あの魔剣は本当に危険だから正直、今の俺でも制御できるか不安なんだ。事実、もう意識をのつとらけたから・・・」

「なるほど。かなり複雑な状況ですね・・・。」

マジでついていけねえ

「今の話からするとやはりこちらの召喚術が原因かもしれんのだ」

「一概にそうとはいえませんが、一つ可能性があるんです」

「『可能性?』」

みんながレックスの言葉に食いついた。

「さっき説明した五つの世界『機界ロレイラル』『鬼妖界シルターン』『霊界サプレス』『幻獣界メイトルパ』最後の一つに未だ説明されない『名も無き世界』というのがあるんだ。おそらくここはそこだと思っ」

「『名も無き世界?』」

「またも全員はもった。こんなはもりやすかったっけ、おれたち。」

「詳しいことは分かんないんだけど確実に通じてる世界。さっきナギが言った『ヒーロー』。前に名も無き世界から来た人がそんなことをいってたんだ」

「レックスの世界じゃあヒーローはねえのか!？」

「そ、そうだね。少なくともそんな言葉は無いかな」

な、なんてこった・・・ヒーローが無いなんて。恐ろしい世界だぜ
リンバウム・・・。

「バカは放っておくとして」

「バカってなんだゴラアアア」

「確かにそれなら可能性としてならあるかもしれない」

ちきしょう。普通にスルーしやがって、後で千の雷食らわせてやる！

「ですがリンバウム以外の世界で召喚術を使うのはありえないの
でしょう？それに昔この世界の魔法使いが別世界に侵略したなんて
こと、聞いたことありませんし」

「そのことなんだけどね、名も無き世界の人はリンバウムを攻撃
してないみたいなんだよ。それにたまたま召喚に成功するぐらいだ
から存在があるていどのことしかわかってないってこと」

「つまりほとんど分かっていないからこそ一番その名も無き世界が
ここである可能性が高いと」

「そういうこと」

レックス、お前まだこの世界に来たばっかなのによくそんなこと考
え付くな。顔からして思ってたけどやっぱり頭良いんだなこいつ。

「参考までにレックスがあつたことのある名も無き世界の人の特徴

を教えてくださいかな？」

「そうだな、ご老人でお茶好き、若い頃教師をしていて畳や着物、鬼界妖の文化が一番自分の世界に合ってるといったよ」

「なあそれって・・・」

「・・・そのご老人は日本と言ってなかったか？」

「あっそうそう！日本っていったよ」

「「「「・・・」」」」

そこ忘れちゃだめだろ。レックスって意外と抜けてるところあんな。

「・・・あ、あはは・・・」

「フウ、まあいいでしょう。とりあえずおおかたの事情は分かりましたから。みなさんも聞くことはもうありませんか？」

「あ、ちょっとまってくれよ。レックスってここに来る前なにやってたんだ？」

「俺？俺は島では教師をやってたよ」

「教師か。レックスは普段でも戦闘は得意なのか？」

「教師になる前に軍隊にいたからそれなりには」

「なんかこれも事情がありそうだな。まあそれは今度聞くか。」

「フム、わしからもいいかの？」

「なに？」

「おぬしは魔剣を使うとかなり強くなるとみえる。しかしシャルトスが復活しているならばウイスタリアスはどうなんじゃ？」

たしかに。レックスにとって害にならないウイスタリアスが無かつたらこのさき俺たちもつらいからな。ナギはもう仲間にしたつもりでいる

「今シャルトスが表に出てこないからちょっと試してみるね」

マジか！つか大丈夫かよ。

「はああああ」

集中しながらかざしている手にはとんでもない魔力が集まっていた

「お、おい。こりゃあ・・・」

「っ、なんて魔力だ・・・」

「・・・かるくナギの魔力を超えていますね」

みんなきつそうだ。こんなでかい魔力を近くで感じるのは初めてかもしれないねえ。

「じゃがシャルトスのような禍々しい気はせん。まるで心が洗われるような・・・」

お師匠がそんなことを言っているとレックスのてには蒼色の魔剣が握られていた。

「す、すげえ・・・」

「なんとも・・・美しいですね・・・」

「・・・綺麗だ」

みんなが魔剣に対する言葉は褒め称える言葉になる。そりゃそうだろう。さっきまでの空気を一変させて透き通るような空気になり、感じるのはただ神聖さ、魔剣をみて思うのはただ美しいという感情。

「・・・ふう。うん！大丈夫、普通に使えるみたいだよ・・・ってどうしたのみんな？」

「いや、なんでもないぞ。それよりよかったの、使えて」

「ほんとだよ。おそらく俺が極限まで精神を削らなければシャルトスに操られることはないと思う」

お師匠と話してるレックスからは未ださっきの感情が途絶えない。
すげえな、やっぱあいつは俺の見込んだとおりの男だぜ。
・・・っと、いつまでも呆けてる場合じゃないな。

「んじゃこれからよろしくな」

「・・・へ？」

レックスが今日一番にポカンとしてる。

「へ？ってなんだよ。おれたちもう仲間だろ？」

「まったくナギ、あなたという人はもう少し順序を明確にしないと
わかりませんよ？」

はあ？順序？

「つまりまずはちゃんと迎えなきゃいけない、だろ？」

ああ、そういうことな。

「そっか。悪かったな、いきなりで」

「え？い、いや・・・」

「ほんじゃ改めて・・・」

「「「「『アラルフラ赤き翼』へようこそ！」「「「「

「・・・ありがとう！-」

こうして赤き翼にレックスが加わった。ちょっといろいろ謎なやつ
だけどこれからよろしくな！

- - - side ナギ out - - -

「ところで元の姿に戻らなくてよろしいのですか？」

「あ……」

結局最後まで抜けているレックスであった。

青は赤へと（後書き）

前回三日に一回と言っておきながら七日経ってしまいました。本当に申し訳ありません。

なんとかレックスが赤き翼に加入しました。というわけでこれからバンバン飛ばしていくのでよろしくお願いします。

・・・なんかこんなこと前回も言ったような

レックスとサモンナイトの世界観

- - - - レックス - - - -

出身地：異世界リンバウムの田舎

職業：家庭教師、セイバー抜剣者

リンバウムの田舎から軍学校へ進学。学費を村から出してもらったため遊ばずに勉強に励む。その結果主席で軍に上がったが、軍に不満を感じ辞職。

新しい職業を探して名家（貴族）の家庭教師になり、船でその子供と都市へ移動中、嵐に見舞われ無人島に遭難する。

その島は召還術の実験場で喚起の門という大量召還装置と、それらと島を統括する遺跡によって呼び出されたはぐれ召還獣が四つの集落を作り、暮らしていた。

最初は人間を警戒したが、レックスの優しさに心を開く。

他にも、一緒に流れ着いた帝国軍やこの実験島を作った無色の派閥の者達が島をねらい、レックスとその仲間たちが立ち向かっていく。

だが島に来たのは偶然ではなく、シャルトスという恐ろしい魔剣に導かれたからだった。

それゆえ何度も精神をのつとられかけ、無色の派閥との戦いの途中、不安定な所をつかれ、シャルトスは砕けてしまった。

しかしレックスの生徒がその破片を集め、今度は遺跡の意志ではなく、レックスの魔力を核に魔剣を再生させる（刀鍛冶で）。

そして新たにできた蒼い魔剣をウイスタリアスと名づけ、今度は自分の意思で魔剣を振るうことを決意。

島を救ったのである。

- - - サモンナイト世界観 - - -

サモンナイトの世界は六つの世界により成り立っている。

まず中心であるリンバウム。ここには人間が住んでおり、その昔他世界からの侵略を受けたことで防衛策として送還術を会得。

しかし今では送還術が変化し、召還術に。

他世界から生き物を呼び出し、誓約という戒めで無理やりに使役している状態。

そのため召還術を道具と誤っている者も多く、主人をなくした無法者の召還獣も人間を恨んでいることが多い。

次に機界ロレイラル。

どの世界よりも科学が発達し、住人は機械で、融機人^{ベイガー}という人間ぽい人もいる。

機械人形や機械兵士といった人型の戦闘兵器も有り（要するにオー

バーテクノロジー)。

三つ目は鬼妖界シルターン。

日本の戦国時代らへんを想像してくればokです。

妖怪、忍者、陰陽師、鬼人などや、文化も昔の日本です。

四つ目は霊界サプレス。

幽霊はもちろん、天使や悪魔はここです。

霊的な妖精も。

五つめは幻獣界メイトルパ。

その名の通り魔獣や一般的に考える妖精、亜人と言われる人間より力が強い者がここ。

特に妖精種は滅多に見えない。

理由はラウスの命樹といわれる樹の力を借りて別の異空間に隠れながら暮らしているから。

最後は名も無き世界。

詳しくは明らかではないが、たまにこの世界から召還された学校の机や、そこから来たのが人間であることから、名も無き世界は地球である。

サモンナイト1の主人公は地球から来たけど魔法があつたかは想像。

きつと魔法は秘密になってたから知らなかったただだよ・うん、きつと……

え〜というわけでこんなとこでしょうか。今レックスがいんのは魔法世界じゃん！っと思う方は後々話しに出していきますのでご勘弁を。

サモンナイトを知らない人にサモンナイトを完全に教えるのは正直無理なのでなんか雰囲気だけでも感じてもらえれば幸いです！

もし何か聞きたいことが有りましたらそこに質問して下さい

長くなりましたがそれでは本編へLet's GO

黄昏と蒼（前書き）

自分なりに急いで書きました・・・ハイすいません遅くて・・・。

なので誤字脱字があると思いますのでその辺は読者の方の包容力でスルーもらとうれしいです。

黄昏と蒼

レックが紅き翼に入ってから3週間が経った

こちらの世界の状況、ここが日本などの旧世界ではなくもう一つの地球、魔法世界であることや、こちらの世界での戦い方、言語や常識（言葉は理解できるし喋れるが、読み書きができない）などを学んでいた。

元が強かったが、自分の世界には無かった瞬動などの気の使い方や魔法などの魔力の使い方がある程度学ぶとレックスも戦線に参加した。

普通にナギたちと肩を並べられるほどだった

そうして3週間がたち、紅き翼は帝国と連合がぶつかり合う場所、オスティアにいた・・・

「くっ」

ゴオオオオオ

[illegible]

ゴォン　ゴォン

「遅かったか！」

ヘラス帝国とメセンブリーナ連合が敵対すると真ん中、
『王都オスティア』

「ちッ・・・」

日が落ちかけ、暗くなるはずの空には大量の戦艦。
地上は鬼神兵が何十体もいる。

「気に入らねえぜ！」

そんな戦争の物音しかないオスティアをねらったのは帝国だった。

「どうやら今オスティアは『黄昏の姫御子』のおかげで耐えられているみたいだね」

古き民の文明発祥の聖地であるオスティアを奪還するために。

「黄昏の姫御子……何だってそんなもん!？」

だが実際は違う。

「歴史と伝統だけが売りの小国に他に手はないでしょう」

帝国は国そのものはもとより、別の物を手に入れようとしていた。

「だが王族だろ！？まだ小さな女の子だって話も聞かぬぞ」

そう、それは戦争の道具のように扱われる者。

「冷静になれナギ、やかましいぞ」

「俺は常に冷静だつつの」

外見は小さき少女。

「でも確かに酷いね・・・こんなところで小さな女の子を盾にするなんて」

「戦争ですからね・・・向こうの真の目的もおそらく」

そして彼女は王族であり、まっさきに守られるべき存在。

「ウム、それに少女の歳もわしやアルのように見た目どおりとは限らぬ」

・・・のはずだったのだが

「くそっ」

彼女は戦争に必要とされる。『人』ではなく『物』として。

（オスティア前衛）

帝国からの圧倒的な攻撃、その戦力差からオスティアはすぐに制圧されるはずだった。

しかしそれを止めたのが『黄昏の姫御子』である。

オスティアの入り口付近で陣取っている塔。

そこで彼女の力を利用した結界が張られていた。

その結界は魔力や気存在を許さない。

故に必要とされるのは姫御子という『人』ではなく、その力を得るだけの『物』であった。

だが帝国も馬鹿ではない。魔法は効かずとも鬼神兵などの強力な物理攻撃はいくらでもあるのだ。

「くっ・・・防御結界・・・」

黄昏の姫御子へと鬼神兵が手を伸ばす。

「「「うわぁ！」「」」

ドオン

刹那、その鬼神兵が真っ二つに倒れる。

「そんな子供までかつぎ出すことはないよ」

その者、赤き髪を蒼白に変え

「そうそう、俺たちだけで十分だぜ」

溢れ出す威圧感は周りを包み込む。

「お、おまえは・・・」

圧倒的な存在感をかし出す彼は・・・

「
・
・
・
誰だ？
」

まだ知られていなかった。

「だ〜からいったらう？レックスはまだあまり知られてねえから俺にやらせるって」

「せっかくの見せ場をバカにやらせるのはもったいなかろう」

「何気に酷いねゼクト・・・」

「フフ、でもなぜでしょうか。なぜか後々の重要なものをぶち壊した気がするのですが」

「そんなことよりそろそろ動いたほうがいいんじゃないのか？」

「ん？ああ、そうだな」

「ま、まで！お前ら『赤き翼』か！？」

男は見たこともない男の後に来た者達を見て言う。

「ああそうだ。だから後は俺達に任せな」

「たかが5人でなにができるというんだ！」

男は叫んだ。あたりまえだろう。空を埋め尽くすほどの戦力にたった五人で立ち向かうというのだから。

「おいジジイ。俺を誰だと思ってやがる」

そして彼は言う。

「俺は最強の魔法使いだ！」

「なっ……」

「倒した本人でもないあなたがいつでも今ひとつ説得力がありません

んね」

「あーあーるせーよ。だから俺にやらせろって言ったろ」

「あはは・・ゴメン、俺なんかでちゃって」

まるで生まれてきてごめんと言っているように・・・とまではいかないがそこそこ落ち込んでるようだ。ただ、それは目立てなかったからでなく、仲間にとって何か都合の悪いことをしたのではないかという不安からの物だった。

「だ、大丈夫だって・・気にしてねえからっ」

その様子を見てすぐに弁解の言葉を発するが・・・

「そうじゃよ。なんせこやつはアホじゃからのう」

ブチッ！

その時、なにかが切れた。

「あんだとこのシヨタジジイッ！」

ブチッ！

ナギの言葉をトリガーに発動。

「・・・しょたじい？フンッ！おぬしのような若造に言われる筋合いはないわ、この『アホ頭』がつ！」

「アホ頭！？鳥頭ならまだしもアホ頭だあ？いくらお師匠でもゆるさねえ、表に出やがれ！」

「もう表じゃろうが・・・だからおぬしはアホで馬鹿なのじゃよ。よからう、くるがよい。まだまだ魔力の高さだけに頼っておるひよっこに稽古をつけてやろう」

「ハッ！今の俺はつえーぞ。いつもは教えてもらってるが今ならただのガキに見えるね！」

そして戦いの火蓋は切って落とされた・・・

「ってちょっとまってえええ！」

明らかに状況を見殺した二人の喧嘩に詠春が思わずつつこむ。

「おや詠春、いらっしゃったのですか？」

今までほとんど空気だった詠春にやっと気づいたアルとレックス。

「ちよっ！おまえそれは酷いだろさすがに！」

「え、詠春・・・」

「おおレックス、お前はちゃんと気づいてたみたいだな。それよりあの二人を止めないと」

そう言って詠春は帝国そっちのけで魔法大合戦を繰り広げているナギとゼクトを指差す。

「そもそもおぬしのような鳥頭のアホがリーダーを務めること自体反対じゃったんじゃないは！」

「なにい！」

「それにおぬしから魔力を盗ったら何が残る！ただ顔が良いだけの馬鹿ではないか。そのようなアホ＆馬鹿なおぬしには本当のことさえ言えんのか？」

ゼクトは珍しくナギを挑発するように罵倒を続ける。これほどあからさまに怒ったことは今まで無かった。

「だったらシヨタジジイってのもホントのことだろ？」

「なんじゃと！」

「もしかして嫉妬してんのか？あーあー確かにその体じゃあなあ、さっきも切れた音が『プチッ』だなんて随分とコミカルだったもんな、お師匠？」

「・・・消す!!」

「やれるもんならやってみやがれっ!!」

さらに激化してゆく喧嘩。その勢いはとばっちりで帝国の兵を倒すほど。

「・・・これは止まりませんね。まあ何気に相手の戦力が低下していくので良しとしましょう」

「まったく・・・あいつらは」

「な、なあ詠春」

「ん？なんだレックス」

その顔はなにかとても言いづらそうで苦しそうだった。

「あ、あのな・・・」

それはまるで怒られるのを怖がっている子供のような顔。

「どうしたんだ？言いたいことがあるならハッキリ言ってくれよ」

詠春もそれを察したのか柔和な笑みを浮かべてレックスに話しかける。

「怒らない？」

「？ああ大丈夫だよ、だから早く言ってくれよ」

レックスの確認の言葉に？を浮かべながらも聞く。

「そうか。俺さ・・・実は」

沈黙、それは嵐の前の静けさ。

「さっきまで詠春がいること忘れちゃってたんだ・・・あ、あはは」

詠春の空間がピシッとひび割れる。

「え、詠春？」

レックスの呼びかけにも答えずただひっそりと言。

「・・・お」

「お？」

「おまえもかああああ！！！！」

瞬間、いきなりの絶叫に驚いたレックスと塔にいた者たちは『ビクッ』と肩を震わせる。詠春と同じく空気になっている少女とアルを除いて。むしろアルは面白そうな顔をしている。

「なんでだ！俺はそんなに存在感薄いのか？というかなんでいまごろだああ！」

数々の不満の声と共に狂う詠春。

「フフフ、レックスも中々したたかですねえ。忘れたところにまた思い出させるとは」

「ええ！」「ごめん！言いそびれちゃったから言ったんだけど・・・」

「いいんだよ、どうせ俺なんか・・・」「ブツブツ

レックスからの遅延呪文（言葉の）を受けた詠春は塞ぎ込む。

「さっさとくたばりやがれ！」

「くたばるのはおぬしじゃこの阿呆」

「またアホつつつたなゴラア！」

「アホではなく阿呆じゃ馬鹿者が」

ギャーギャー　ギャーギャー

ブツブツ　ブツブツ

帝国そっちのけなこの状況を見て男たちは思った

・・・本当にこいつらに任せても良いのかと。

「それより大分前から後ろの人たちも空気になってますよ」

「あ・・・す、すみません。なんだか騒がしくて」

「い、いや・・・」

この場が騒がしい原因はお前だろとは言えない。

「ん？」

レックスが視線を感じ、気づくと鎖で繋がれている少女がいた。

「（なるほど、この子が黄昏の……）」

『酷い』ただその感情が芽生えた。

鎖で繋がれ、口からは血を流している。目には感情らしきものは無く、自分もシャルトスによって意識が飛んだときはこんな目をしているのだろうか。レックスは思った。

「（こんな小さな子供が……）」

レックスは歩く

周りにいた男どもにはもはや意識も向けず

感情を無くしてしまった、いや、心の奥底へしまい込んでしまった少女の下へ。

「やあ、えっと・・・君の名前は？」

彼は問う

「ナ・・・マエ・・・？」

どんな些細なことでもいい

「そう、君の名前」

目の前の少女を少しでも知るために

「アスナ……」

彼女の意味を知ってもらうために

「アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

物ではなく、人としての意味を知ってもらったために

「長いね・・・でもアスナか、いい名前だ」

彼は戦う

「よし、アスナ、ちょっと待っててね」

取り戻すために

「ナギとゼクトがかなり倒したけどまだ残ってるから」

「まあ本当にあとは雑魚だけです。手早くいきましょー」

一人の少女の心を

「……」

闇から救い上げるために

黄昏と蒼（後書き）

本編では着々とキャラ崩壊が起こっています。

おまけに後々のアスナの記憶イベントをかなり変えてしまいました
（汗）

それに更新ペースもほんとに遅くなりましたや。

で、ですが次は今回よりも格段に早いと思いますのでよろしく願
いします！

なにか要望やご質問がありましたらそちらのほうもどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7402k/>

名も無き世界への召喚～inネギま～

2010年10月14日12時06分発行